

株式会社ジェイコム東京 東エリア局・南エリア局・西エリア局

放送番組審議会 議事録

平成 29 年度(2017 年度) 株式会社ジェイコム東京 放送番組審議会は、2018 年 3 月 13 日(火) ジェイコム東京 東エリア局にて開催された。

【放送番組審議会委員】

宮澤 誠一 様
臼井 素子 様
山田 隆史 様
山下 隆久 様
松戸 克彦 様 代理) 上原 弘之 様
永田 浩三 様
渡邊 嘉二郎 様
三谷 啓子 様

事業者側から J:COM チャンネル(11ch)と J:COM テレビ(10ch)について報告があった。

【質疑応答・意見交換】 進行：宮澤会長

■ 杉並区との取組について

委員

先日の大雪時には迅速に対応してもらいありがたかった。今後はどの規模の情報であれば放送できるのかを詰めていきたい。先日 杉並区内の地域区民センターが停電となり土日含めて臨時休館となった。区のホームページや SNS での発信は考えているが、J:COM チャンネルで流して頂けるのであれば地域密着度が増すと思う。「困ったときは J:COM を見る」という視聴習慣にもつながる。

事業者

停電といった比較的 小規模の情報に関してはスポンサーの問題もあり L 字放送などでの対応は難しい。ただし、J:COM の基本方針である市民貢献として、データ放送の活用はできる。杉並区だけデータ放送を強制的に立ち上げることも可能なので、まずは相談してほしい。

委員

今も避難所開設といった情報は、その都度ご提供した内容を迅速にデータ放送で表示して頂いているので、どこまで細微な事案に対して対応が可能かしっかり話していきたい。

住民票の自動交付機が故障しているなど、ホームページで緊急提示している案件は少なくない。いろいろなメディアを活用できると非常に助かる。

■府中市との取組について

委員

来年にラグビーのワールドカップ、再来年には東京五輪があるので「スポーツタウン府中」としてもいろいろ取り組んでいる。行政の力不足もあり、市民の盛り上がり、機運の高まりがないという実感。是非 J:COM の力を借りて進めていきたい。

多摩地域の課題として20～30年先には人口減少が顕著に表れてくる。府中市は現状維持という見通しだが、転入者の呼び込みが重要。多摩地域の西部は生活圏から外れてしまっているエリアもある。新聞の購読数も激減している中で、地域メディアとして情報化社会の一角を担ってほしい。

また、「まるごと府中」の制作に携わっているが、市民の顔が見えてこない。市民が出演することで視聴者も増えるし認知も上がっていくと思うので、もっと市民が参加できるような番組づくりを考えていきたい。

事業者

弊社にとっても認知・周知は課題。行政や地域の皆様のご協力を得て広めていきたい。

想定外につながったり、発見・気づきがあったり、地域の特色を活かした発想力豊かな番組を市民の皆様と共同で作っていきたい。市民が参加できる、双方向性が高まるような番組の構想もある。SNS のInstagramや Twitter、Facebook からの画像投稿やプレゼント応募を行える取り組みを考えている。

■和光市との取組について

委員

和光市のイベントを大小問わず取材して頂いてありがたい。昨年度の「2017 年アジア・エアガン選手権大会」は開始前から特集のうえ、大会の様態を生放送・生配信してもらい感謝している。

リオ五輪では射撃競技が J:COM で放送されたので、東京五輪でも放送を期待したい。射撃競技は朝霞駐屯地内で行われるため、和光市民が多く足を運ぶ。市としては会場に入れない方用にパブリックビューイングを考えている。

事業者

「2017 年アジア・エアガン選手権大会」の生中継は、リモートカメラなどの開発チームが半年がかりで携わりお届けすることができた。東京五輪で扱える競技は未定だが、放送できたら嬉しく思う。開催地の役割は応援にいらっしゃる方をいかに楽しませるか。せっかくの観光ツールでありプロモーションの機会なので協力していく。

■ 練馬区との取組について

委員

練馬区の独立 70 周年ということでイベントやキャンペーンが多数あった中、お付き合いくださりありがたい。

今年は新たに「練馬こぶしハーフマラソン」や「薪能」のアプリ配信も実施して頂いた。

来年度に向けて「よりどりみどり練馬」の広報キャンペーンも新たなステージを目指している。区民と積み上げてきた実績を活かして、SNS を利用した双方向のやり取り・番組参加の一体感を大きな柱としていきたい。

その一方、スマホに変更したばかりという高齢の視聴者も多いので、番組の情報量や先進技術に対応できない IT 弱者への対策も欠かせない。J:COM と一緒にどのように PR していくか考えていきたい。

また、「区民参画」をキーワードとしてホームページのリニューアルを予定している。“行政が知らせたいこと”を押し付けるのではなく、“区民が知りたい情報”を、いかにアンテナを張って吸い上げるか…という観点から広報全体で取り組んでいる。お知恵を借りながらより良いものをつくっていきたい。

事業者

J:COM 加入者にもシニア世代がいらっしゃるので、リーチできるコンテンツの開発は共通の課題。我々も知らせたい情報のみを発信していた部分があるので、今後は視聴者が知りたい情報を扱っていくようシフトしたい。より上のステージを目指して邁進していく。

■ アプリ「ど・ろーかる」について

委員

アプリ「ど・ろーかる」を実際にインストールしているが、各自治体の登録者数がわかるようであれば知りたい。

登録時にエリアの設定を求められるが「関東」しか選べないようだ。区内の登録者数を知ることで自治体内での認知度が計れるため、活用法が広がる。

事業者

「ど・ろーかる」がダウンロードされたエリアまでは調査できていないのが現状。地域に合った視聴促進に関しては引き続き啓蒙活動を続けていく。

事業者

放送後でもご覧になれるうえ、遠方にいらっしゃる方でもアクセスできる。大きな可能性を感じている。

■ 災害時の情報発信に関して

委員

先日 大雨が降った際、杉並区でも防災メールが夜中鳴り続けていて不安が募った。大雪特番のように現

地の状況を映像で伝えられるのは J:COM の強みだと思う。

事業者

1 月の大雪の際は 2 時間の特番を生中継、アプリ「ど・ろーかる」でも配信した。大雪や台風への対応に関しては引き続き実施していくので、自治体の皆様にも情報の入手にご協力頂きたい。

基本のコンセプトは“生活に役立つ情報”。狭小エリアの事案でも、困る方が発生するのであれば対応すべき案件だと考えている。

委員

練馬区にとって、災害時の対応や緊急性に対してテレビの役割は大きい。“ALL 練馬”として具体的な役割分担を行ったうえ、放送における公益性という観点から整理していく必要があると感じている。通信網の関係から自区の情報だけ…とはいかないが、練馬の情報をより深く掘り下げていきたいという葛藤がある。いざという時に“地域にあって良かった”と区民の皆様が思ってくれるようにしていきたい。

事業者

災害時に備えて各自治体と災害協定を結んでいる。有事災害に関しては必ず扱う方針だが、BCP の観点上、社員の安全を確保する必要もある。被災期の初動としては遠隔操作が可能な L 字放送、次に東京広域放送で各エリアの情報を周知、復旧期に狭小エリアの情報へと戻る…といったスキームの整理を行っていく。きめ細かい安心・安全情報をお届けするのが J:COM の使命だと思っている。

■ 字幕放送に関して

委員

過去の審議会で情報弱者に対する字幕放送の検討が話題に上っていたが、進捗があれば教えてほしい。

事業者

「障害者差別解消法」も施行されており、字幕放送への需要は理解している。

2018 年～19 年にかけて送出サーバの統合を計画しており、新サーバ導入を機に字幕放送に対応できるようにテスト運用の準備を進めているところだが、運用方法も難しく、費用もかさむ。総務省の行政指針でも有線テレビジョンについては努力目標とされており、前向きに検討している段階。

■ インバウンドの獲得

委員

府中市では 4 月から外国人目線の情報発信を行っていく。市が雇用した外国人スタッフが、Instagram や Twitter を使って外国語で府中市の魅力を発信する。J:COM とご一緒できることがあれば是非 調整し

ていきたい。

委員

昔 日本は「電子立国」と呼ばれていたが、“ものづくり”は海外に移行してしまった。現在は観光産業が大きな柱となっている。簡易なもので構わないので、英語・中国語・韓国語などの字幕が付けられると良い。

「ど・ろーかる」のように世界にリーチできて、いつでも何回でも見られるメディアで J:COM エリアの情報を配信していれば、その地域へ観光客を誘致できると思う。2017 年度の編成方針にある「地域活性化に貢献」へ直結する施策でもあり、ちょっとした配慮でもっと愛される放送局になるだろう。

■ 編成方針に関して

委員

首長が出演する「長つと散歩」は地域密着でなければ実現できない番組だと感じる。

「杉並人図鑑」は手作り感が素晴らしい。確かに好感度はあるが、もう少しセットへの配慮があっても良い。

カメラの位置が近く、MCとゲストの距離も近いので、出演者を身近に感じることができる。手書きのフリップも味があって良い。

事業者

平昌五輪の一部競技に関して放送させて頂いたが、地上波で日が当たらなかったような競技の放送に対して感謝の声をたくさん頂戴している。地域の中にもスポットが当てられていない素晴らしい取り組みはたくさんある。我々が行政や地域の皆様と一緒に掘り起こしていきたい。

委員

2017 年度の編成方針に基づいてきちんと作られていた。外れることなく、しっかりとした印象。

「ど・ろーかる」だと画質のクオリティは下がるが、番組のクオリティは維持できる。1 つはきちんとしたシナリオ、2 つは視聴者の納得感、3 つは感動。3 分～5 分の短尺で構わないので、繰り返し見たくなるような番組づくりを目指してみてもどうか。NHK「おはよう日本」で元路上生活者が働く練馬区のカフェが特集されていたが、尺が若干短く残念に感じた。J:COM であれば地域貢献という目的を持ってより深掘りした制作ができる。

事業者

アプリ「ど・ろーかる」では短尺のコンテンツ制作を考えている。平昌五輪の前には 1 分の平昌観光 VTR を用意した。今後も資金を投入して注力していく。

委員

全体として、とてもクオリティが高い番組が多いという印象。生放送・収録問わず、放送は一朝一夕で劇的

に質が向上するものではないので、日々業務に当たっているスタッフの総力が上がっていると感じた。

「第 61 回 東京高円寺阿波おどり」では、浜田山にジムを構える具志堅用高氏がボクシングのスタイルで参加するという発想に感心した。「練馬薪能」のような伝統芸能は中身の理解が大変だが、説明を丁寧に付けていて、担当者の深く伝えようとする努力に好感を持った。お祭りもそうだが、流れていってしまうイベントをどうやって丁寧に、面白く、深く伝えるかは担当者の理解力によるものであり、“伝える力”が育ってきていると感じる。

■これからの地域との向き合い方

委員

行政の抱えている課題などを丁寧に拾って伝えようとしている姿勢も評価できる。NHK も地域のニュースを丁寧に取り上げていく方針だと聞いている。テレビ離れを食い止めるには地域との深い付き合いが必要であり、特にローカル局は地域のキーパーソンとのつながりが重要となる。そうした意識の持ち方は J:COM の方針とも合致している。「人図鑑」のゲストは肩書きがある方が多いが、街の中から応援したい市井の人を見つけてくると息の長いシリーズになると思う。

事業者

地域メディアの役割は、街の知られていない人や物を発見して発信していくこと。ベースがある程度できあがった段階で次のステージに上げられるよう努力していく。

事業者

地域からの情報を吸い上げたい、地域の人たちの顔や声を知りたい…という大きな流れを感じた。

SNS の登場で世界的にも情報の有り方が変わる中、J:COM がどう取り組んでいくかが大事。

やるべきことは多く、どう進むべきかのヒントを頂戴したと思う。

以上